

こんな勉強がしてみたい!

特色ある[大学の授業]研究

北海道教育大学

へき地・小規模校教育実践 プログラムの開発 (特色ある大学教育支援 プログラム・2005年度)

「へき地校体験実習」をカリキュラムに導入
小さな学校で子ども一人ひとりに向き合う

北海道教育大学 へき地教育研究センター長

村田文江 教授

大阪教育大学・同大学院修士課程修了。社会科教育学が専門で、北海道の地域教材を研究している。

北海道では、へき地教育振興法(昭和29年制定)によりへき地指定を受けている小学校が全体の50%を越えます。今日では教育環境も整い、「へき地」=不便というわけではありませんが、過疎化による児童生徒数の減少は止まりません。全校児童が10人に満たない小規模校も多く、2つの学年で編制する複式学級が1,185学級と日本一です(鹿児島県519学級、岩手県309学級:平成17年度)。

複式学級は二つの学年を同時に指導するので、たとえば教師が3年生を教えているときに(直接指導)、4年生は自分たちで学習をすすめます(間接指導)。教師は毎時間2つの教材研究を行って、特に間接指導で、子どもが自ら学ぶ力をつけるための指導を工夫します。

へき地・小規模校の教師は、これまで実践の場で指導法を研鑽していましたが、学校統廃合が進むなかで複式指導の継承が困難になっています。こうした実態をふまえ、本学はへき地・小規模校教育に関する授業科目を教員養成カリキュラムに位置づけました。特に教育実習の

充実を図って「へき地校体験実習」を選択科目として開設しています。

へき地・小規模校には、小さいことが大きな効果をもたらす教育活動がたくさんあります。異学年交流の良さはその一つです。学校行事のリーダー6年生を憧れの眼差しで見つめる3~4年生、低学年をキビシク導く高学年は、先生も顔負けです。小さな学校では一人ひとりが主役であるとともに、全員が協力しあっています。

こうした子どもの姿は、教職員が子ども一人ひとりを理解し、きめ細かな指導を行うからこそ可能になります。学生には、このことを自らの目で確かめ、子どもと丁寧に向き合う体験をしてほしいと願っています。実践的な子ども理解は、教員養成の根幹だと考えるからです。

学生指導には、経験豊かなスーパーバイザーがあたります。さらに、複式指導や特色ある教育活動を記録した映像資料を制作し、図書館でのDVD貸出しやストーリーミングビデオ配信により、多くの学生がへき地・小規模校教育への理解を深めることができるようにしています。

複式学級指導の映像資料(DVD)





へき地・小規模校教育実践プログラムの開発

上の学年が下の学年の面倒を自然に見る小さな学校のよさを体験、教師になる決意がさらに強固に



北海道教育大学旭川校3年
加藤美春さん
北海道帯広柏葉高等学校出身。小学高学年時の担任教師との出会いで、人の人生に多大な影響力を持つ教師になる夢を抱く。実習に参加し、へき地教育のおもしろさ、すばらしさを知り、教師への思いをますます強めている

子どもたちの可愛さ、授業の難しさ

旭川校では「へき地教育実習」を開講していませんでしたが、昨年度は試行として岩見沢校の4年生と一緒に受講することになりました。2年生の私は、正直なところ、子どもたちにどう話しかけていいのか、どうふれ合っていけばいいのか、とても不安でした。

初日、全校49人の子どもたちとの「出会いの集い」は、児童会長の進行で、自己紹介やゲームで楽しい時間をすごしました。子どもたちから積極的に話しかけてくれたり、遊びに誘ってくれたおかげで緊張は徐々に溶けていきました。明るく、素直で元気な子どもたち。照れながらも、人懐っこい子が多かったです。最終日に近づくと、すべての子どもたちが可愛くてしょうがなくなりました。

2日目からは、配属された2年生の学級(5人)での授業参観。休み時間には体育館で子どもたちと一緒に遊びましたが、放課後は、教壇実習の指導案づくりを行いました。教材研究は宿舎に帰ってからも続き、寝るのは毎日午前2時。

いよいよ教壇実習。教科書や指導書を

読み込み、指導案も担任の先生と一緒に時間をかけて丁寧に作るなど、万全の準備をして臨んだつもりでしたが、実際にはとても緊張してしまい、指導案通りの授業はできませんでした。私はまだ2年生だったので、1時間しか授業をしましたが、授業をすることの難しさを知り、自分に足りないもの、取り組むべき課題を発見した貴重な経験でした。

たくさんの感動を体験した

マラソン大会のお手伝い、最終日の「お別れの集い」など、子どもたちとふれあう場も多く作っていただいた実習でしたが、中休みや昼休みに遊んでいる子どもたちのようすが心に残っています。学年の違う同士がいっしょになって、上の学年の子が下の学年の子の面倒をみていました。これがへき地校の良さなんだと改めて感じました。

また、いつも子どもたちの話題が絶えない職員室のようすも印象的でした。自分が担任している児童だけではなく、すべての児童を指導しようという先生方の心意気が強く感じられました。

私はこの教育実習を受講して、教師になりたいと心から思えるようになりました。はじめは子どもたちとうまく関わりを持てなかったことも、うまくいかなかった教壇実習も、生まれて初めて先生と呼ばれた感動もすべて、今の私の糧になっていると思います。



緊張の教壇実習



学校は違ってもみんな仲よし(マラソン大会)



子どもたちからの「贈る言葉」(お別れ会)

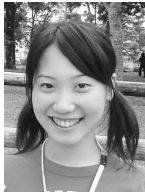


5人の教え子たちとハイ、ポーズ!



へき地・小規模校教育実践プログラムの開発

複式クラスの教壇実習で、へき地教育の難しさ、個に応じた指導の大切さを身をもって体験



北海道教育大学釧路校4年

井上桃子さん

北海道紋別北高等学校出身。北海道の小学校教師になりたい、そのためにへき地教育に関する勉強もしておきたいということでそのプログラムが充実している北教大釧路校に入学。へき地教育実習に参加し、その思いをさらに強固にしている

へき地校の魅力にはまりました

1年生の5月、へき地校の運動会に行く機会がありました。道具係としてお手伝いするつもりでしたが、生徒だけでなく、両親、祖父母、地域の人々までもが参加して盛り上がる大運動会に驚きました。

その後も、へき地校の子どもを対象とした科学実験や地域行事の地曳き綱、川探検などで何度も訪問し、すっかりへき地校の魅力にはまってしまいました。

釧路校では、平成14年度から「へき地教育実習」が、主免実習（3年次5週間行われる小学校1種免許取得のための教育実習）を終えた学生を対象に、2週間行われます。

募集を待ってさっそく応募したところ、実習校は偶然にも、大学に入学して初めて訪問した標津町の小中併置校でした。

私は小学校5・6年生の複式クラスに配属されたのですが、同時に2つの学年で違う内容の授業を行うことに大きなプレッシャーを感じました。

複式授業の経験が自信になった

1週目、算数の複式授業では片方の学

年にばかり指導が偏ってしまいました。国語などの単式の授業（2つの学年が同じ教材を学習）でも、少人数による意見の少なさをうまく補えなかったり、苦戦続きでした。教材研究や指導案づくりにも毎日夜遅くまで追われっぱなしでした。

2週目に入ると、複式の授業にもだぶ慣れることができました。たった2週間の間に20時間近い教壇実習をしたことは、本当に勉強になったと思っています。

複式授業では、片方の学年に課題を与え、その間にもう一方の学年の授業を進めるのですが、個人差があるために、同じ課題でも早く終わる生徒と終わらない生徒が出てきます。個に応じた指導の大切さとその大変さを痛感しました。

へき地教育実習に参加して、教師になりたいという気持ちがさらに大きくなりました。うまくいかなくて悩んだことが大半でしたが、複式授業を経験したことで、教材研究や授業の進め方などには少し自信がついた気がします。

また、へき地校ならではの良さも近くで見ることができました。地域の方が学校の体育館に集まって先生と一緒にバレーボールをしたり、上の学年の子どもが下の学年をひっぱっていたり、学校を含めた地域の温かい雰囲気などを本当に身近で感じることができました。

北海道で教員になったら、絶対にへき地校へ行きたいという思いもさらに強くなりました。



複式クラスでの算数の研究授業
まず5年生に課題を提示



次に6年生に移って課題を解決
黒板はL字型に配置しています



音楽の授業を参観しています



教え子たちと一緒に